

目次

はじめに	1
これまでの主な災害	2
被害	3
被災	4
飼い主のみなさまへ	5
同行避難のフロー図	6
災害が起こったら・・・～あなたは A さん? B さん?～	
日頃の備え	
ペットのしつけと健康管理	8
住まいや飼養場所の防災対策と備蓄	9
発災当日	
発災	10
ペットとの同行避難	11
発災当日～5日目	
避難所での受入れ	12
避難生活	13
発災1週間目以降	
避難生活	14
まとめ	15
一般飼い主向け 人とペットの災害対策ガイドライン	
平常時に飼い主が行うべき対策	
1 住まいや飼養場所の防災対策	16
2 ペットのしつけと健康管理	17
3 ペットが行方不明にならないための対策	18
4 ペット用の避難用品や備蓄品の確保	19
5 情報収集と避難訓練	20
6 家族や地域住民との連携	21
7 ペットの一時預け先の確保	21
災害発生時に飼い主が行うべき行動	
1 ペットとの同行避難	22
2 避難中のペットの飼養環境の確保	22
最後に	23

はじめに

災害は突然起こります。

飼い主とペットが共に災害を乗り越えるためには、日頃からの備えが欠かせません。

この冊子では、これまでの災害で、ペットと飼い主に起きたさまざまな問題を見直し、

飼い主がどのような対策をとればよいのかを整理しました。

**災害のとき、あなたとあなたの大事なペットを守るために、
今、できることを考えてみましょう。**



これまでの主な災害

1990年代～2000年代

- 1991年 雲仙普賢岳噴火
- 1995年 阪神淡路大震災
マグニチュード7.2の地震が大都市を直撃。人命とともに約9,300頭(犬約4,300頭、猫約5,000頭)の動物が被災した。
- 2000年 有珠山噴火
避難の際、300頭以上の動物が取り残され、問題となった。
- 2000年 三宅島噴火 (その他の災害3件)
島民とともに約250頭の動物が島から避難した。
- 2001年 災害5件(地震津波1件、風水害2件、雪害1件、その他1件)
- 2002年 災害4件(風水害3件、その他1件)
- 2003年 災害6件(地震津波3件、風水害3件)
- 2004年 新潟県中越地震 (その他の災害11件:地震津波1件、風水害10件)
最大震度7,震度5以上の余震が10回以上発生。被災者は10万人以上、5,000頭以上の動物が被災した。車中避難によるエコノミークラス症候群が問題となった。
- 2005年 災害7件(地震津波3件、風水害3件、その他1件)
- 2006年 災害5件(風水害4件、雪害1件)
- 2007年 災害8件(地震津波4件、風水害4件)
- 2008年 災害5件(地震津波2件、風水害3件)
- 2009年 災害5件(地震津波2件、風水害3件)
- 2010年 災害3件(地震津波1件、風水害2件)
- 2011年 東日本大震災 (その他の災害6件)
マグニチュード9.0の地震に加え、沿岸部では津波により多くの人命が失われ、それとともに多数のペットも犠牲となった。避難後に自宅にペットを連れに戻り、津波に巻き込まれた事例や、避難所でのペットによるトラブル、放浪状態となった動物の救護活動など、様々な問題が浮き彫りとなった。
- 2012年 災害8件(風水害7件、雪害1件)
- 2013年 災害15件(地震津波3件、風水害11件、雪害1件)
- 2014年 災害25件(地震津波4件、風水害10件、雪害8件、火山2件、その他1件)
- 2015年 災害19件(地震津波6件、風水害7件、雪害1件、火山5件)
- 2016年 熊本地震 (その他の災害15件)
震度7以上の地震が複数回観測された。家屋倒壊の不安から車中やテントへの避難者が多く、エコノミークラス症候群や熱中症対策が問題となる。また、同行避難後、ペットの受入れ体制が十分でない避難所もあり、飼養環境の確保等が課題となった。
- 2017年 災害16件(地震津波4件、風水害6件、雪害5件、火山1件)
- 2018年 平成30年7月豪雨 (その他の災害9件) <<2018年7月末現在>>

2010年以降

被害

地震による建物の倒壊



津波による被害



地震による地割れ



豪雨による洪水被害



被災

災害は、ある日突然起こります。これまでの生活が奪われ、経験したことのない不便で不安な生活が始まります。

被災することがどのようなことなのか、どのような問題が発生するのか、経験のない多くの方には、具体的に想像するのは難しいことです。

以下に示すのは、これまでの災害で実際にあったペットに関する問題です。

災害時には・・・

- 家屋の倒壊や倒れた家具によりペットが逃げられず死亡した
- 床一面にガラスが飛散し、人もペットも足に怪我を負った
- 外飼い猫のため、被災当日から自宅に戻らず同行避難できなかった
- ペットの受入れ可能な避難所がどこにあるのかわからなかった

避難先では・・・

- 避難してしばらく、人の支援物資はあるが、ペットフードの支援はなかった
- 避難所で犬が吠えて迷惑をかけるため、やむを得ず車中での避難になった
- 糞の放置や毛の飛散などが原因で他の避難者とトラブルとなった
- 救援物資のペットフードを食べなくて困った
- 避難所にペットとともに避難したが、特定食（治療食等）の入手に苦労した
- 犬がケージになれていないため、過度なストレスを与えてしまった
- 犬がペットシートに排尿、排便せず、苦労した
- 他人や他の場所、他の動物に慣れないため、どこにも預けることができず苦労した
- 感染症の予防接種をしていないペットが多くいたので感染が心配だった



飼い主のみなさまへ

災害でペットを守ることができるのは飼い主だけです。
自分が無事でないとペットは守れません。
以下の3点が重要になります。

1. 飼い主が自らの安全を確保することが、災害時にもペットを適切に飼養することにつながる
2. 健康面やしつけを含めたペットの平常時からの適正な飼養が、最も有効な災害対策になる
3. 災害時にはペットを落ち着かせるとともに、逸走やケガなどに注意して、ペットとともに避難する

<防災でのキーワード「自助」「共助」「公助」>

自助：自分とペットの身は自分で守ること

共助：近隣住民や飼い主同士の助け合い、広域の助け合い、他の組織を交えた助け合い

公助：行政機関などによる支援

大規模な災害では、行政機関などの公的機関による支援が始まるまでの間、自助や共助により乗り越えなければなりません。

飼い主には、まずは自分の安全を確保し、そのうえで、ペットの安全と健康を守り、他者に迷惑をかけることなく、ペットを適正に飼養管理する責務があります。

災害が起きたときの行動をフロー図で確認してみましょう。

同行避難のフロー

もしも、今、災害がおこったらどうなるか？
 ペットとの同行避難について、災害発生から
 1週間の流れをフロー図にまとめました。

メモ

- 同行避難とは、避難行動を示す言葉であり、避難所でペットを人と同室で飼養管理することを意味するものではありません。
- 避難所には、指定緊急避難場所や指定避難所などがあります。

